

「聞くこと」を取り入れた学級経営

足利市立久野小学校教諭 見 目 匡 央

I はじめに（今までの教師生活の反省）

今までの教師生活をふりかえってみると、わたくしはわたくしなりに、教師のあるべき姿や理想像について、時には書物をひもといたり、時には同僚と話し合ってみたり、時には研修会や研究会の中から考えてもみた。この中で大切なことは、われわれの教育活動は、子どもたちのために行うものであり、子どもの持っている能力を最大限に発揮させることであり、ひとりひとりの子どもがより充実した学校生活をおくらせる営みであると思ってきた。

このことについては、今でも間違っているとは思わない。しかしながら、子どもたちのためとはいえ、子どもの気持ちもわかれろとせず、子どもの気持ちにくだらぬ入ろうともせず、教師の一方的な考えや計画によって行われ、問題行動に対しては、禁止や抑圧という手段によってのみ指導が行われなかったか、ということである。それには、消化し得ない学習指導に対する教師のあせりや、山積した雑務がそうさせたのだというかも知れない。しかし、それは、あくまで教師のひとりよがりな独善的な考えではなかったか、ということである。だからといって、子どもたちの指導の中で、こうした禁止や抑圧などが必要でないとは思わない。

しかし、子どもたちが当面している問題は何か、それを教師はどう考え、どう対処しなければならないか、ということとをどれ程真剣に考え指導にあたったか、ということである。

ふだんの学習指導を例にとってみれば、学習意欲がみられないとか、学習中ぼかんとしているとか、落ちつきがないとか、手を挙げない、といった問題行動が見られた時、なぜそうなのか、なぜそうなったのか、それらの指導の方法として教師はどうしなければならないかということとを、どれ程真剣に考え指導にあたったかということである。こうした問題行動の素質的・環境的・心理的要因を考慮せず、表面に表われ現象のみをとらえて、徒らに、禁止や抑圧といった手段によってのみ指導が行われなかったかということである。

II 「聞くこと」を学級経営の中に取り入れようと思ったわけ

わたしが、こうした反省がなされた所以は、一つは児童指導の研究の過程の中においてではあるが、直接の理由は、カウンセリングの養成講座の中で、「聞くこととカウンセリング」という話を聞いたからでもある。

この話の中で、特に感動を受けたことは、「聞くこと」が、いかに大切な働きをしているかということである。「聞くこと」は、決して消極的な、非生産的なものではなく、積極的で、生産的な働きであるということである。

カウンセリングを成功させるためには、相手の言う事柄がわかるというだけではいけない。ことばの裏にかくされている、ことばに表われていない相手の気持ちがわかり、相手の気持ちの中にはいっていきようにならなければならない、といわれた。

これは、カウンセリングにおけるカウンセラーの態度・心構えについての話であったが、このような態度や心構えが、学級経営の中にも必要でないか、と考えられたからである。

教師がかりに、このような配慮がなく、教師の一方的な考えや計画によって、問題行動に対して

は、禁止や抑圧という手段によってのみ指導が行われるとしたらどうだろう。その教師に沿え得る子どもがあるとすれば、その子どもはいいというかも知れない。しかし、この子にとっても、人間性や人格形成の上で問題があるであろう。そればかりか、その学級の大部分の子どもは教師から離れ、情緒不安定となって、教師に反抗をしたり、内こもる子どもが生まれたり、落ちつきのないまとまりのない学級となるに違いない。

このようになった時、その責任は、子どもの能力や親の養育態度にのみ原因があるといえ得るであろうか。かりに、教師にもその責任の一半があると口で唱えただけでは、それまでに失われた子どもへの損失を、どれ程償い得るだろうか。

ここに学級経営の中に、「聞くこと」を取り入れ、指導に生かそうとした所以がある。

Ⅲ 学級経営の中での「聞くこと」についての考え方

カウンセリングにおける「聞くこと」が、子どものいう事柄がわかるだけでなく、子どもの気持ちが変わり、子どもの気持ちの中にはいっていかなければならぬとするならば、学級経営の中でわたしのねらいとするところも、それにかわりはない。

しかし、このことが、子どもの欲求や欲望をそのまま受け入れ、子どもの言いなりになろうとする教師の主体性のなさをいうものではない。なぜなら、子どもの人格形成にとって、子どもの欲求や欲望をそのまま受け入れ、そのまま行動させるということが、個人的にも、社会的にも決して望ましいことではない、と思うからである。だからといって、子どもの気持ちをわかろうとし、子どもの身になろうとする気持ちには変わりはない。こうした教師の態度や心構えが、子どもへの安定感と、教師への信頼感を深め、望ましい人格形成や学力向上にも役立つと思ったからでもある。こうした考えの裏には、けがをした時、自然になおってしまうような肉体の持っている成長力や回復力、よくなろうとする働きが、精神の中にもあると信じたからでもある。

それ故、子どもからの欲求や欲望は、たとえ、それが教師にとって都合の悪いことであっても、個人や社会にとって是認されるものでないにしても、欲求は欲求、欲望は欲望として受けとめ、どうすることが、子どもたちにとって正しい生き方なのか、どうすることが幸せとなるものなのかを、教師と子どもの温かな人間関係の中で、共に考え、共に悩み、それに対処しようとするものである。

Ⅳ 「聞くこと」を学級経営の中にどのように取り入れたか。

このことについては、前にも少し触れてきたが、「聞くこと」を学級経営の中に取り入れるための経営方針や具体的に実施してきた方法は次の通りである。

Ⅰ 経営方針

(1) 全体的な配慮

- a 進展著しい社会にも対応ができ、機械化された社会の中においても、なお、人間性を失わない、児童の育成こそ、大切な使命であることを念頭におき、事にあたるようにする。
- b 子どもたちにとって、幸せなことは何か、どうすることが望ましい人格形成の助成なのかを念頭におき、事にあたるようにする。
- c 自然や肉体の中にある限りない成長力や回復力、それに、はかり知れない可能性などが、どの子にも秘められていることを念頭におき、事にあたるようにする。

(2) 教育相談的な配慮

- a 子どもたちが、気がるに教師のところにくられるような、温かな態度で子どもに接するようにする。
- b たとえ、教師にとって都合の悪いことであっても、どんなことでも言えるような、許容的で、抱よう力のある態度で子どもに接する。
- c 問題行動に対しては、なぜそうなったのか、なぜそうなのか、素質的・環境的・心理的要因などを考慮しながら指導にあたるようにする。

(3) 学習指導等における配慮

a 教師の聞く態度

- (a) 「聞くこと」の機会の多い場であることに留意し、どんなつまらぬと思われる発言でも、大事にして聞く。
- (b) 学習中における発言は、学習の進行状況を把握したり、次の指導の手がかりとなるもので、大事にして聞く。
- (c) ひとりひとりの能力や発達段階を考慮しながら聞く。

b 児童への働きかけ

- (a) 楽しく学習ができ、よりよい学力の向上を望むには、「聞くこと」が大切であることをわからせる。
- (b) 友だちの発言は、たとえ誤りであっても、ばかにすることなく、最後まで聞くような態度を育てる。
- (c) 最初の発言や、次々に発言されるものなどとの関連において、問題を解決させるようにする。

2. 具体的な方法

(1) 教科指導の面

a 「話し合い」を生かして

学習指導はややもすると、教師の独善的な考えに陥りやすい。その結果が、学習への興味を失い、子どもの自発性や自主性をそこなう結果となる。ここに、学習指導に対する教師の姿勢、「聞くこと」が大切になってくると思う。そこで、わたくしは、学習中も、学習の計画も、「聞くこと」につとめている。その結果、今では、宿題も子どもの手で行われるようになったが、決してマイナスになったとは思わない。

宿題は、班(4・5人)ごとに相談したものを、小黒板に書いて出しているが、子どもたちは、結構考えて出しているので、宿題を忘れてくるものは、殆んどなくなった。勿論、はじめの間は、欲をかいて沢山出したので、「先生が出した方がいい」という声もあったが今は、そのようなことはない。

b 「学習班」と「反省表」を生かして

これらの主なねらいは、班(1つの班が4~5名)ごとの反省が、学習意欲を高め、学力の向上をめざすことにもあるが、それと共に、それらの結果を知ることによって、子どもた

ちをより理解することができる、と考えられたからである。

形式は下記の通りである。記入の仕方は、「月日」と「曜日」のほかは、左欄は、「○」（よくできたと思ったときに書く）、「△」（ふつうだと思ったときに書く）、「×」（よくできなかったと思ったときに書く）で表わし、右欄は、反省事項を簡単に書かせているようにしてある。記入の仕方が簡単なためか、毎日よく記入されている。

時には、「どの班が一番か。」ということで、学習成績の順位を書かせたこともある。それも、はじめの間は、競走意識が高められてよいと思ったが、長くやっていると、悪いところは、いつも悪い結果となったり、「お前ができないからビリになったんだぞ。」というような非難があったりして、それよりは、学習態度や生活態度を重視した指導が望ましいと思ったので、今はそのようにやっている。

班長 ○○○○		○班反省表				書記 ○○○○		
副班長 ○○○○						司会 ○○○○		
月 日 (曜)	反省 項目	ドリル が でき たか	よく 勉強 したか	家庭 学習 したか	仲 よく でき たか	協 力 で き たか	き ま り が 守 れ たか	反 省
○月	日(曜)							
○・	○・							
○・	○・							
○・	○・							

c 「カード」(「教えてね。」というカード)の利用によって

このカードの学習欄のねらいとするところは、学習の興味状況を知ることによって、教師の反省資料にしたいという意図のほか、子どもたちは、自分たちの気持ちや担任教師にわかってもらえる、という「聞くこと」の利点が考えられたからである。

カードの形式は、次表の通りであるが、記入の仕方は簡単で、「自分の名前」と、「記入月日」のほかは、「○」（楽しく勉強ができたと思うときに書く）、「×」（楽しく勉強ができなかったと思うときに書く）だけである。普通の状態のときは、何も書かないことにしてある。自由欄は書いても書かなくてもよいことにしてある。

教えてね				
月 日 (ばんごう)(なまえ)				
国	社	算	理	音
図	体	道	特	
家のこと	友だちのこと	そうじのこと	給食のこと	係のこと
先生に話したいこと		ある	ない	
自由らん				

カードの絵は、男児用と女児用の二種類あり、この絵は男児用のもので、女児用のカードは略す。

- よかった、楽しかった
- ふ つ う
- いやだった、楽しくなかった
- 何もないとき

d 「反省ノート」の利用によって

このノートのねらいとするところは、一つには、ひとりひとりが、1日の自己反省をすることによって、学習意欲を高め、学力の向上をねらったこともあるが、ノートを通じて、子どもをより理解しようとする「聞くこと」の利点が考えられたからでもある。

このノートの形式や、記入の仕方は後で述べるが、自分にあった、無理な書き方ではないので、だれもが書いているので、今後も続けていきたいと思う。

(2) 道徳指導の面

a 「道徳の時間」を生かして

この時間の指導で大切なことは、価値の追求によって、自己の変容に結びつくものでなければならない。それだけに「話し合い」や、「道徳ノート」を生かし、子どもの気持ちをわかろうとし、子どもの気持ちにくい入ろうとする「聞くこと」に重視してきた。前述の通り、自然や肉体の持っている限りない成長力や回復力が、人間の精神の中にも存在することを信じ行ってきた。

特に、道徳ノートはひとりひとり目を通し、子どものありのままの姿や気持ちを理解するようにつとめてきた。勿論、必要に応じて、賞賛を与えたり、反省を求めるといった配慮もした。

b 「他領域」との関連において

道徳の指導は、道徳の時間にのみ行われるものではなく、学校教育の全領域の中で行われなければならないことはいうまでもない。そこで、わたくしは、学校の教育目標や重点目標・学年・学級の目標・学校週番、学校のきまりなどとの関連において、また、他教科や特別活動との関連において、また、前述の「bのカード」や、「反省表」、「反省ノート」などを考慮して指導にあたるようにしてきた。

(3) 特別活動の面

a 学級会活動

(a) 「話し合い」の中で

特別活動のねらいとするところは、子どもたちの自主性や自発性や自律性を伸ばすことにあり、学級会活動においても例外ではない。それ故、学級会活動においても、これらを伸ばすために、子どもの発言を大切に、「聞くこと」に留意してきた。係を決めることや、学習班を編成する場合でも、子どもたちとの話し合いで行われたことはいうまでもない。そのほか、「げきの発表会」や「誕生会」などの計画や、会の進行などについても、子どもたちの声を「聞くこと」によって行うようにしてきた。

(b) 「カード」、「反省ノート」、「反省表」などの利用によって

これらの利用は、前述の「教科指導の面」の利用に準じて行ってきたので、ここでは、これらの説明は省くこととした。

b 学級指導

(a) 「話し合い」の中で

学級指導においても、「聞くこと」が大切であると考え、子どもの意見や、学習意欲などを考慮しながら指導にあたるようにしてきた。給食指導をはじめ、保健指導、図書館の利用指導、学校行事の事前・事後の指導など、すべてそのように考え行ってきた。

(b) 「カード」、「反省ノート」、「反省表」などの利用によって

これらの利用は、前述の「教科指導の面」の利用に準じて行ってきたので、ここでは、これらの説明は省くこととした。

c 学校行事等

(a) 学習意欲を考慮して

学校行事の事前・事後の指導においては、学級指導等で行われるが、その時こそ、「聞くこと」が大切となってくるが、行事が行われている時でも、子どもの気持ちをわかってとす「聞くこと」に留意し、子どもの学習意欲を高めるように心掛けた。

(b) 「カード」、「反省ノート」、「反省表」などの利用によって

これらの利用も、「教科指導の面で」の利用に準じて行ってきたので、ここでは、これらの説明は省くこととした。

d その他のくふう

(a) 遊びをともに

子どもたちは、教師と一緒に遊ぶことを望んでいる。そのため、休み時間や放課後など

は、できるだけ一緒に遊ぶようにしてきた。こうすることが、子どもの気持ちになろうとし、子どもの気持ちにくい入ろうとする「聞くこと」につながる、と思ったからである。

(b) 給食をともに

給食は子どもたちが、楽しく食事ができるよう、子どもの席(1班から2班へと順に坐ることにしてある)の中にはいり、一緒に話をしながら食事をしてきた。自己表現の劣る子や、情緒不安定な子に対しては特に留意し、ごくありふれたことばで、子どもの気持ちを和らげ、子どもの気持ちをわかろうとし、子どもの気持ちにくい入ろうとする「聞くこと」につとめてきた。

(c) あいさつは教師から

学級が明るいふんい気となるよう、教師から進んであいさつをするようにしてきた。朝は「おはようございます。」とか、「今、何しているの。」といったありふれたことばでその場のふんい気を和らげ、こどものありのままの姿や、こどもたちの牛の声を聞くようにつとめてきた。こうすることが「聞くこと」につながると思うからである。

(d) 合唱や合奏を生かして

明るい学級となるよう、子どもたちが選んだ合唱や合奏を、毎日、朝の学習前や帰りの前に行っている。はじめは、全校合唱や全校合奏の曲にそって行ってきたが、子どもたちの声を「聞くこと」によって、今のようになったが、みんな楽しそうにやっているので、今後も続けていきたいと思う。

(e) 「賞」の利用によって

「賞」の形式は下記の通りであるが、学習や係活動、それにふだんの善行に対しては、その都度この賞を与えるようにしてきた。しかし、どの子も認めてやらなければならないと思い、2ヶ月に1度位はこの賞を与えるようにしてきた。この考えの裏には、子どもの気持ちを吸みとり、それに賞賛を与えることによって、その後の行動にプラスになると考えられたからである。

賞

あなたの

は

おともだちみんなのてほんで
す

昭和 年 月 日

久野小学校第 学年学級会

(f) 「学級ポスト」を生かして

学級に「学級ポスト」を設置し、子どもの悩みや、教師への願い、改善策などを自由に書かせ、担任教師の反省資料とした。その多くは、「〇〇君は、何もしないのに、けとばすから注意してほしい。」といった種類のもが多かったが、そこには、子どものありのままの姿とまことの声を「聞くこと」ができると思ったからである。

(g) 「カード」(「教えてね。」というカード)の利用によって

この「カード」のねらいとするところは、前述のほか、学校や家庭生活の中で、子どもたちはどう悩み、どう指導しなければならないか、を知ろうとするものである。「聞くこと」についての考えは前述の通りである。この「カード」はどの子にも数枚渡しておいていつでも、担任に渡せるよう(学級ポストに入れてもよいことにしてある。)にしたり、担任の方から意図的に出すときもある。記入の方法は、「○」、「×」などで表わす。

この「カード」は、担任教師の反省資料となったり、教育相談の補助資料となったりしてよいので、今後も続けて利用したい。

(h) 「反省表」の利用によって

この「反省表」のねらいとするところは、前述のほか、社会生活に必要な社会規範や協働性・人間関係などの反省資料とすることにもある。また、「聞くこと」についての考え方は前述の通りである。

(i) 「教育相談」への配慮

「教育相談」こそ「聞くこと」の大切な場であると考えている。問題行動に対しては、個別相談やグループ相談などにより、学習中でも、休み時間や放課後などでも、ちょっとした時間を利用して行うようにしてきた。相談の場は、教育相談室を利用することはせず主に教室で行っている。

(j) 「保護者」への配慮

㊦ 「家庭訪問」を生かして

4・5月の家庭訪問のほか、ちょっとした理由(「こちらの方に来たから。」とか、「かぜのぐわいはどうですか。」といった理由)で訪問した。こうした訪問のねらいは保護者と担任教師の人間関係を深めることにもあるが、家庭のありのままの姿や、保護者の本当の声を「聞くこと」によって、子どもの指導に生かしたいと思うからである。

㊧ 「家庭通信」を生かして

子どもを理解し、その指導のために「家庭通信」はよい。それは単に学校からの行事報告だけでなく、親との対話のできる通信である。

親は子どもの問題について異常なまでに関心を示したり、殆んど関心を示さなかったり、そのための情緒不安が意外に多いように思われる。こうした中で教師は、これらの啓蒙と親との対話によって、子どもをより指導ができると思うからである。しかし、実際は、これらの努力が足りなかったことを反省している。

㊨ 「PTA学年部会」を生かして

子どもの問題行動についての話し合いは、どの学校でも行われていると思うが、やもすると教師の一方的な考えや話で会が進められてきたように思う。そこで、わたくしは、グループ相談のよい場であると考え、親の真の声を「聞くこと」につとめてきた。今年度は、学期2回程度であったが、回数がふやすことができればなおよいと思う。

⑤ 「教育相談」を生かして

子どもを理解しよりよい指導のためには、前述の配慮も必要であるが、それにも増して大切なことは、親との対話のできる、教育相談であると思う。ここで忘れてはならないことは、相手の気持ちになろうとし、相手の気持ちにくい入ろうとする態度、「聞くこと」であることはいうまでもない。今年度は、3月も含めて、特別なグループ相談は1回となり、個別面接の方は、11名で、延べ回数は17回以上になると思う。

V 結果の反省

「聞くこと」を学級経営の中に取り入れたその考えや方法については、その人の人生観や、教育観によって批判のあることと思うが、わたくしは、意義のあることと思いつつ今後も続けていきたい。これらの研究を本格的に取り組んで来たのは、1年足らずで、その効果の程を数量的に挙げることは、現時点ではできないが、子どもたちは、休み時間になると、遊ぶことを催促したり、担任教師の家まで数キロもあろうというのにわざわざ遊びに来たり、以前よりは親しみを増し、情緒的にも安定し、学習面もより積極的になった。

しかし、1月の調査で「先生は公平に扱っておると思えますか。」という問いに対して、25名中、4名の者が「公平でない。」と答えているのである。子どもの扱い方に対し、大いに反省したところであるが、これらの子をひとりひとりみつめてみると、物の見方が暗く、悲観的であったり、神経質で内向的な子であったり、非協調的でわがままな子であったり、ひと一倍独占欲の強い子であったり、何らかの問題のある子であった。

また、他児童についても、ひとりひとり観察してみると、何らかの問題があり、こうした子をどうとらえ、今後どう対処しなければならないか、多くの問題が山積しているのである。これら問題を持つ子の予防や治療については、時には、きびしい態度で臨まなければならないと思うが、それにも増して大切なことは、子どもの気持ちをわかってほしい、子どもの気持ちの中に飛び込み、共に考え、共に悩む教師の態度・心構えであると思う。また、教育相談の方法や技術、各種の心理療法などについても大いに勉強しなければならないことと思う。また、「聞く」ための具体的な方法についても研究の要することであり、改善の要することもある。これらの研究については、今後の課題である。

(以上)

評

教師は児童生徒を指導するという考え方をもち、その内容として指示、教授、訓戒など教師中心の立場、教師→生徒の方向性に陥りやすい。この実践記録は、このような考え方をもう一度見直し、本当に子どもの身につく教育のあるべき姿というものを究めようとしたところに価値がある。「人間の変容は他からの指示によってはなされない。自分自身の意志決定によってのみなされる」といわれる。この人間関係論に基礎をおき、「聞くこと」という分野で実践に取り組んだことは立派なことである。教育とは、つまるところひとりひとりの子どもたちの伸長であり、その個性にあった指導こそ真実の教育の姿である。その意味でこの「聞くこと」を中心とした実践は意義深い。今後さらに実践を継続し、教育の分野において「聞くこと」の理論をうちたてられることを期待する。